コラム　花と虫と子どもと未来
5　森の案内人が森や川や海で見つけた園庭のイメージ

森や川や海岸と呼ばれる環境にも、ヒトの影響の多少があります。ヒトの影響が少ないところでは、ヒトが植えたり整えたりしたわけではなくても、調和が取れ生き生きとした植物や生き物たちの様子が見られます。多様な環境に出合い感じることは、これから創り出そうとする風景のイメージや、そこまでの道のりのイメージをもつことに大きな役割を果たすと、僕は考えています。今回は僕が出合ってきた環境を、ここで少し分かち合いたいと思います。

6月の八ヶ岳南麓の標高1,400mの森です。低木から高木までが多様に生い茂り、倒木が朽ちてゆくままになっています。撮影時はまとまった雨の後で、窪地に水が集まっていました。そこには多年草であるクリンソウが花を咲かせ、バイケイソウも伸び伸びと生きていました。低木～高木が共に生きるイメージは園庭の樹木のバランスの良い植栽計画に、日陰の窪地に適応した多年草が生き生きと生きるイメージは日陰で湿気が多い区画をガーデン化する計画に活かせそうです。

4月の八ヶ岳南麓の標高1,200mの渓谷の森です。この辺りはシカの生息数が多くネコノメソウはシカに食べられたり、また山菜採りや釣りに来たヒトに踏まれたりすることで数が少なくなっていましたが、この倒木の陰にあたるところだけは、シカもヒトも歩きにくいようで、群落をつくって花を咲かせています。このように弱い植物が食べられたり踏まれたりしないことで生きている様子を見ると、園庭でも、子どもたちの小さな足から守られる区画を整えることで、可憐なお花畑を再生することができそうです。

12 月の沖縄県南城市の海岸です。石灰岩の上にクサトベラやススキの仲間が生えています。強い潮風があたる場所でも生きてゆける低木や多年草です。岩上でも日陰になっている場所では、多年草のホソバワダンが花を咲かせていて、セイヨウミツバチが頻繁に訪れていました。この風景を見ていると、開けていて陽射しが強く強烈な風にさらされるような園庭でも、生態系の再生を諦める必要はないんだと勇気が湧いてくるようです。

少しヒトの影響が多めなものもご紹介します。7 月の山形県酒田市の標高 300m のスキー場の夏のゲレンデの隅の様子です。ニッコウキスゲやカンゾウの仲間やアカツメクサのお花畑になっています。草丈は膝上程度です。スキー場のゲレンデは放っておくと森林になってしまうため、夏の終わりに草刈りをするところが多いです。草刈りのタイミングをうまく調整することで、特定の多年草が毎年元気に花を咲かせる草原環境が整うことを示していると言えます。園の敷地に余裕があるところでは、年に 1 ～ 2 度の草刈りのタイミングをうまく調整することで初夏～秋のお花畑を楽しむことができるということです。

ちょっと海外へ飛びましょう。3 月のベトナム北部、カットバ島の石灰岩の崖です。土壌が少ない環境に適応したり、乾燥に強い低木や蔓性の植物が崖を覆ったりしています。そこに姿を隠すように、たくさんの野鳥の鳴き声が響いていました。この環境は、狭い園庭に面して建つ園舎の壁面を、蔓性の植物で覆ってゆくことの意味を教えてくれているようです。たとえ周囲がコンクリートジャングルやビル街だったとしても、壁面を植物が覆うことで、そこは多種多様な生き物の生息場所となり得るということです。

いかがでしたか？　豊かな生態系を再生したいと願って、園庭をいくら見つめていたり歩いていたりしても、図面や書籍とにらめっこしてみても、思い浮かばないイメージが、次から次へと思い浮かぶようになるには、私たち自身が様々な環境にこの身をさらして、認知してゆくことが、結局のところいちばんの近道なのかもしれません。